

調査団体名	杣組(そまぐみ)	団体代表者名	鈴木今衛
設立年	2008年5月	団体URL	なし
活動地域	恵那市中野方周辺	調査員	杉野、本田
取材日	2009/12/16	レポート作成者	本田義裕
自分たちで伐って運んで地域活性			
<活動内容>			
<p>地域の山を見直し、手を入れていくことを目的とし、2008年5月に結成。個人の林家の委託を受け、近隣の数カ所の山で間伐を行っている。2008年12月には「木の駅プロジェクト」に参加し、林地残材の搬出技術を学び、またその材を活かして、地域通貨「モリ券」を地域内商店で循環させることを経験した。このことは「山」の活動から「地域」の活動へと範囲を広げるきっかけとなった。わずか2週間の試行期間だったが、伐り出す我々だけでなく、地元みんなが元気になった。これからもこのシステムを地元に着定させたい。</p>			
<会のモットー(何を大切にしているか)>			
<p>この地域にはまとまりがある。周囲との区切りがはっきりしていて、その中に生活圏が残っている。地域の中でお互いに助け合う「おきもり」(お手伝い)の心意気も残っている。自立した地域のために、責任を持って山を任せられる山師を目指す。現在はまだボランティアレベルだが、今後目指すのは「山師」。まずは自分たち自身の山を伐れるようになって、その次は人の山も伐れるようにしたい。</p>			
<設立から現在に至るまでに変化したこと>			
<p>杣組発足前にタ立山森林塾に参加した。その当時は「ボランティアで山を伐る」というのが信じられなかった。しかも、山を持っている人たちよりまじめに山に取り組んでいる。そんな人たちとの交流はいいことだと思う。これからも遊びの部分として一緒にやればよいと思っている。</p>			
<連携している団体・専門家・自治体など>			
<p>タ立山森林塾、土佐の森・救援隊、堀尾ハウス(調査3-9)、矢森協等</p>			
<今までに行った調査・研究>			
<p>「木の駅プロジェクト」試行実験(2009.12.5~20)、堀尾ハウスの合板パネルの工法を調査中</p>			
<現在直面している課題>			
<p>「木の駅プロジェクト」に参加したことで新たな領域に進むことができた。予想外の展開であり、また今後が楽しみでもある。しかし、「木の駅」が持続可能なシステムとなるためには課題が残されている。一番の課題は材の最終利用先である。今のところ、一時的な持って行き先は見つかっても、持続可能とは言い切れない。</p>			
<今後やってみたいこと>			
<p>財産区の間伐を請け負うことで材の確保はひとまず可能。あとは材の最終持ち込み先。遠方だと運賃で材の価値が削られるので、なるべく地域内で地元の材を活かしたい。地元の材を活かした製材技術なども培いたい。また最近、今後の活動を記録として残していく必要性を感じている。</p>			
<そのためにはどんな情報・人脈が必要か>			
<p>財産区との連携・協力を得て、計画的、長期的に山の適正管理をする必要がある。また、今後は、今回の試行期間には参加できなかった人たちにも参加してもらい、地域全体で取り組めればと考えている。そのためにも、持続的に山の材を利用するシステムが必要。地域外の人たちとの交流とその記録。</p>			

<その他、伝えたいこと>

2008年5月結成の新しい団体であるが、「木の駅プロジェクト」参加がきっかけとなって活動範囲が増えた。メディアにも取り上げられ、注目されているようだ。しかし、このシステムが回っていくためには、いろんなつながりが必要。基本は地域の人々のつながり、木と商店(モリ券)のつながり、そしてボランティアの人たちとのつながり。そのつながりを大切にして、なるべく外に頼らないでやっていきたい。そのためにも、山師の気概を持って取り組む必要性を感じている。ボランティア感覚でただ伐るだけでは、山は活かされない。昔ながらの、山師の本当の意味を大切にして、孫の代まで残る仕事をしていきたい。



木の駅説明会



積み込み



木の駅研修会